

マルコの福音書7章からイエスのなされた事を学びましょう。

1. ガリラヤ湖の向こう岸に (35-37節)

①ツロの地を去り (35)「それから、イエスはツロの地方を去り、シドンを通って、もう一度、デカポリス地方のあたりのガリラヤ湖に

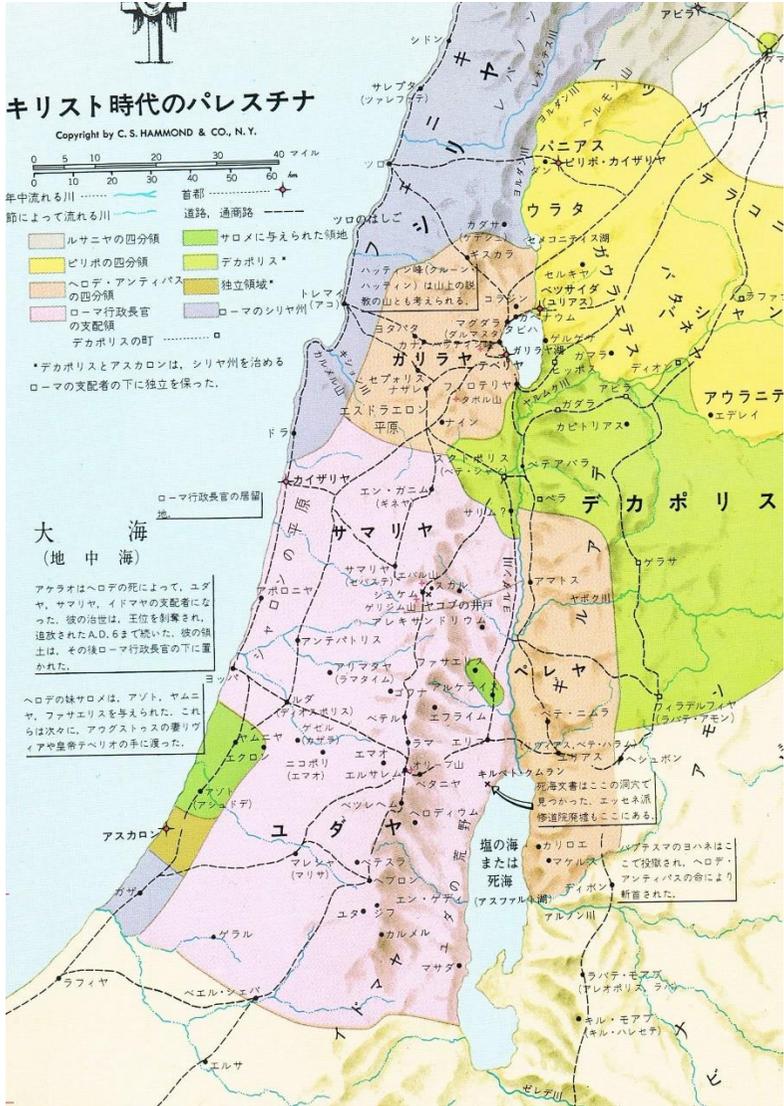
②連れて来て (36)「人々は、耳が聞こえず、口のきけない人を連れて来て、彼の上に手を置いてくださるよう、願った。」その地において、人々はイエスが来られたことを聞きつけて、耳が聞けず、口のきけない人を連れてきたのです。(\*新改訳第二版の訳では「つんぼ」「おし」という言葉が使われていますが、第三版以降は不快・差別用語ということで上のような訳になっています。)そして、人々はこの人に手をおいて、いやしてくださるようにと願ったのです。屋根の上から中風の人をイエスのいる前につりおろした時も、男たちが助けましたが、その優しい心に励まされます。

③その人だけを (37)「そこで、イエスは、その人だけを群衆の中から連れ出し」その時にイエスは、その聾啞(ろうあ)の人を群衆のいる所から、静かな所に連れ出されたのです。イエス・キリストにあっては、群衆のなかで、これ見よがしにいやしのわざを示されることが目的ではなかったからです。その人に対する愛を示し、その人が本当の救いを受けることこそ、重要であったからです。

2その人の耳は聞こえるようになり (37b~39節)

①両耳と舌に (37) その両耳に指を差し入れ、それからつばきをして、その人の舌にさわられた。」イエスがされたことは興味深いです。耳が聞こえない、その人の両耳に指を差し入れました。それから、口のきけないその人の舌に、つばきをつけて触れられたのです。この所作を私たちが真似をしても意味がありません。イエスがこの人を心から愛して下さったことに注目することは大切です。

②エパタ (38)「そして、天を見上げ、深く嘆息して、その人に『エパタ』すなわち、『開け』と言われた。」主イエスは、あの湖上で風と湖の波を静められた時のように、天を見上げられました。そして、深呼吸をされて、その人に「エパタ」と言われたのです。それはアラム語で「開け」という意味でした。生まれた時から聾啞であったその人は、イエスの深い愛を感じ取る時であったでしょう。



③耳は開け (39)「すると彼の耳が開き、舌のもつれもすぐに解け、はっきりと話せるようになった。」キリストの所作とお言葉によって、その人の内に奇跡がおきたのです。その人のうちの主の御力が伝わっていったのです。耳が聞こえるようになったのです。またもつれていた舌が整えられ、話すことができるようになったのです。それまでも、耳は聞こえなくても、目で人の口から言葉の一端を理解できたかもしれません。しかし、もう一方ではあの聖霊降臨の時に弟子たちが外国語で話し始めたことにも類似しています。

### 3. 何が大事なのか (40~41 節)

①言ってはならない (40)「イエスは、このことをだれにも言ってはならない、と命じられたが、」イエス・キリストは宣教当初から、このご姿勢であられました。ツアラアトに冒された人 (重大な皮膚病、ライ病と訳されていた) が癒されたに「気をつけて、誰にも言わないようにしなさい」(1:44)とされています。その理由は、人間は概して、その不思議なわざにのみ心をむけて、魂の救いのことをおろそかにしやすいからなのです。このことを通して、神の愛を学ばないならば、やがてやってくるキリストの十字架の意味をも悟ることがないからなのです。

②言いふらす (40)「彼らは口止めされればされるほど、かえって言いふらした。」ところが、その周りにいる人々は、イエス・キリストによって口止めがされればされるほどに、かえって言いふらしたのです。そこが彼らの愚かなところでありましたが、人間がそれだけ、不思議な力にあこがれ、奇跡的わざをほしいと願っていることがわかります。それ自体は自然な願いであるわけですが、最も大事なことを見失ってしまいやすいことは覚えてほしいのです。

③センセーショナルに (41)「『人々は非常に驚いて言った。『この方のなさったことは、みなすばらしい。耳の聞こえない者を聞こえるようにし、口のきけない者を話せるようにされた。』』」人々の言葉は、第二版の訳にあるのが実態をあらわしているように思われます。「つんぼを聞こえるようにし、おしを話せるようにして下さった!」。人々はよりセンセーショナルに伝えたいのです。週刊誌などの広告などにあるのも、人間の興味を駆り立てるものが多いですが、それと似ているのです。主は、だからこそ、キリストは口止めをされたのです。

### 《結論》

ベートーベンが晩年の10年ぐらいいは耳が聞こえなかったということですね。それなのに、耳が聞こえない時代にもたくさん作曲をしていたのです。交響曲9番もその一つで、その中には多くの人々によって愛されている「喜びの歌」が入っています。シラーの作詞に合わせて作られた曲は、今日でもよく歌われます。そして、それは原曲では、神への賛美と、キリスト教信仰に基づく喜びであるといっても過言ではないのです。耳が聞こえないベートーベンの心の中には、メロディーが鳴っていたのでしょね。

今この聖書箇所において、おそらくは生まれつき耳が聞こえず、話すことができない人が、イエス様によって癒されて、耳が聞こえるようになり、話せるようになるという、すばらしい主の奇跡の御業が記されています。ところが、ここにはこの人の言葉はもちろんですが、表情や反応が記されていないのです。もしかすると、彼も周辺にこのことを言い伝えたかもしれません。しかし、この人は誰よりもキリストのご愛というものを察知したのではないかと思われます。なにしろ、生まれて以来、この人は聞いたり、話したりすることができなかつたのです。ベートーベンは音という者を知って、後天的に聞こえなくなつたわけですが、この人は音も言葉も音楽も何も聞いたことがなかつたのです。幸い、目は見えましたから、イエス様の眼差しやご表情などは近くで見ることができました。両耳に指を入れ、舌につばをおいてくださり、「エパタ」と言っていた、一連の出来事を彼はしっかりと見ることができたのです。この人は、聞くことができるようになり、話すこともできるようになつたというのですから、まさに歓喜そのものであつたでしょう。歌を歌えるなら、それこそ「喜びの歌」を歌いたかつたと思います。彼はイエスが救い主(キリスト)であることがわかつたと思われます。

それでは私どもも、何を求めたら良いのでしょうか。自由に耳も聞こえ、自由に話すことができるなら感謝しましょう。そのうえで、私たちの心の耳が聞こえるようにしてください。また心の口を開かせてくださいと祈っていくことでしょう。そして、キリストの大いなる御力を信じて、私たちの心の耳が主の福音と御言葉に心を向け、心の口が魂からの神への賛美と喜びを歌うことができるようにしてくださいと祈っていくことであれば、なんと幸いなことでしょう。

主イエスによって、「エパタ」と言っていた、閉ざされた魂が開かれていきますように。そして、キリストの十字架が私たちのためであり、私たちを救い出す福音であり、キリストの復活は私たちに希望と喜びを与える福音であることを信じていくことができたなら、なんと幸いなことでしょう。主の恵みがありますように。

